

県立広島大学同窓会 第20回総会・懇親会

日時
令和6年6月16日(日)
11:00~15:00
場所
ヒルトン広島

総会

県立広島大学同窓会第二十回総会が令和六年六月十六日(日)午前十一時からヒルトン広島で開催されました。出席者は各支部支部長、理事、広島・庄原・三原の三大学卒業生並びにそれぞれの前身校の卒業生総数二百十二名でした。まず、会長の北村富美子氏(女大6生)の挨拶で始まりました。続いて議長に川口誠治氏(農短23農学)を選出し、事前に配布した総会資料に沿って議事を進め、理事会提案どおり承認されました。

- 議事内容は、次のとおりです。
- 第一号議案
令和五年度事業報告を承認
- 第二号議案
令和五年度収支計算報告および監査報告を承認
- 第三号議案
令和六年度事業計画を承認
- 第四号議案
令和六年度収支予算を承認

文責 濱田良江

講演(要旨)



演題
「フリーな医師の過ごし方」
講師
小倉健一郎 先生

私は広島農業短期大学畜産学科十期を卒業して、医者になった変わり種の一人。私は今、所属先も全くなく、肩書も全くない。ただのフリーの医者。整形外科や麻酔などさまざまな科をやってきて、何でもやる医者になっている。今専門は何ですかと聞かれると「離島専門です」と答えている。

多くの島には診療所があつて、そこにドクターがいる。そういう人たちは一生懸命、毎日毎日朝から夕方まで診療し、夜間も休日も土曜日曜もずっとオンコールで仕事をしないといけない。医者が一人しかないところは休みがない。

たまにお休みを取りたいという時に、私が一、二週間代打で行く。プチDr.コトーをしながら、災害があつたときは災害支援にも向かつてる。

私がよく行くのは隠岐の島、与那国島、小笠原諸島。小笠原諸島は大きな病院にかかると飛行機で数時間かかる場所、働きがいを感じるところ。与那国島はDr.コトー診療所の撮影地で、私もドラマを見て孤島診療に興味を持った口だ。作中では二人で大きな手術をして術後管理もするけれど、実際には無理だろう。与那国島の人口は千八百人ほどでやっぱり忙しい。生後三カ月の子どもから百歳ぐらいの患者までいる。病気も、外科も来れば耳鼻科も眼科も皮膚科も来る。それを診ないといけない。離島医療は専門外でも断れない。究極の救急病院だと思つている。都会だと救急搬送でたらい回しになるが、ここでは必ず診る。派手さはないが、ずっと守らないといけないのが孤島の医療、診療だ。

広島農業短期大学は通つていた当時、賀茂郡西条町で新幹線も通つていなかった。寮で暮らした二年間は濃厚な人間関係の中で過ごした。私の中ではまさに自分の青春、今の私の人生の始まりがこの短期大学だつたと思つている。出会つた友人、先生、先輩後輩、今も付き合いがあるような濃い仲は他の大学ではできなかった。

今日持ち帰つてほしい言葉は「誰でも医者になれる」ということ。中高の成績は中ぐらい。周りから医学部に行つたことを驚かれる。みなさんも子どもたちから入りたいと言われたら、私も入れたのだから大丈夫と言つてほしい。ハードルは高かつたが、やつてみないと後悔が残るといふ思ひだつた。医学部を卒業し、兵庫県で暮らしていたときに阪神淡路大震災で被災した。被災地に来ていた団体がネパールで医療支援をするのと知つて参加した。妊産婦の死亡率とか子どもの死亡率が大変高い国で、地元の医者と病院を建てた。病院が自立して現地の先生方がやつてくれるまで二十年ほど支援を続けた。麻酔器もモニターもない。小さな子ども手術では、人工呼吸をしながら胸の音を聞く。手首を触つて、血圧や心臓、酸素濃度を確認しながら麻酔をかけた。そうやつて小さな子供たちの命を守るような活動を続けた。

一九九五年に大震災で自分の街だった神戸が大変な被災を受け、その時にたくさんさんの医療チームに助けていただいた。私もこの時から災害医療をやりたいなと思うようになった。十年ぐらいたつてイランの大震災で国際緊急援助隊に参加し、スマトラ島沖の地震でもスリランカの被災地向かつた。中



お知らせ

県立広島大学同窓会
第21回総会・懇親会
設立20周年記念

日時 令和7年6月15日(日) 10:30～14:30

場所 ヒルトン広島 2F太田川

内容 I部 総会・講演・学生発表
II部 懇親会

講演 河田 和子さん

(県立広島大学同窓会顧問 女短2食)



「未来に繋ぐ同窓会への思い」

〈講師プロフィール〉

昭和6年生まれ。広島女子短期大学家政科食物学専攻2期卒業。平成8年広島女子大学同窓会紫水会会長就任。県立三大学統合に伴い、県立広島大学同窓会設立、初代会長に就任。その後、顧問就任。現在に至る。長きにわたり、同窓会を支え尽力した。

13歳で被爆。被爆体験証言活動に参加。修学旅行生にも被爆体験を証言している。

学生発表

広島・庄原・三原キャンパスのそれぞれの学生に、地域貢献や身近な研究テーマ、研究成果などを発表していただきます。

国では国のメンツをかけた外交の最前線にも立った。

二〇一一年に東日本大震災があった。友達と二人で翌日に宮城県へ行った。最後に南三陸町へ行くと、町がなくなっている。全部流された。大きなスポーツセンターにたくさん被災者が暮らしていた。とても寒い中、体育館の中で震えながら暮らしていた。私たちは現地に行って血圧を測ったり血糖を測ったり。皆さん薬を持ってきてないことを心配していた。何も根拠はないけれど大丈夫だよと言ってあげて、安心感を与えるぐらいしかなかった。状態を見て病院に搬送したり、風邪薬を渡したりして被災地を回った。

活動後、地元の関西に戻ると普通の暮らしをしている。私は南三陸の光景

が焼き付いて離れなかった。自分が医者として何ができるかと思っていた時に、やっぱり被災地に行こうと思いい、半年後に石巻市の雄勝町に赴任した。

雄勝町は、リアス海岸の奥地。十八メートルの津波で四階建ての役場の三階まで水が来た。雄勝病院という四階建ての療養型の病院があった。三階建ての病院だったので津波で病院が隠れた。院長副院長をはじめ職員二十七名が当時いた。そのうち二十四名が亡くなり、患者四十名は全員亡くなった。震災の中で一番大きな被害の出た医療機関。患者を置いて逃げられなかったのだと思ふ。

町の人口は大きく減ったが、残った人のために雄勝診療所が立ち上がった。プレハブの診療所はトイレや水道

が凍るくらい寒かったが多くの人が訪れた。支援物資を私が預かって住民に配ったり、高齢者を温泉に連れて行ったり、被災地をめぐる会を開いたり。雄勝病院で訪問診療をしていて助かった看護師さんも手伝ってくれた。

みんな背負うものを背負っていた。私も応えようと一生懸命やり、二年半関わった。一番大変な時期を支えることはできたとと思うが、殺風景な景色を見ていられないという気持ちもあった。長野県の人たちが集めてくれたこのほりが町に上がった。ちょっとでも殺伐とした街に彩りを与えたいとの思いで始まった動き。いろんな人の応援を得ながらやって、今年の四月も見に行けた。今でもこいのほりが上がっている。

雄勝町を離れて十年、街の風景は変わった。今の雄勝町は防潮堤ができて道の駅などを守っている。人の家を守っているわけではなく、復興に何が必要かは考えないといけない。能登半島でも何が大事か考える必要がある。

トルコの震災支援にも行った。向こうではスマートフォンがあれば患者の健康データが確認でき、すぐに薬が処方できる。日本の紙の保険証はオンライン化されておらずデータが分からない。理想の形ではないということを知っておいてほしい。日本はデジタル面で遅れている。避難所も遅れている。一、二カ月暮らす場所。災害は思わぬ時に来るので、最低限の備えと心構えをしてほしい。

雄勝町でお世話になった医師の方が亡くなった。一生懸命生きることを心がけてほしい。そんな私は世界を旅している。これまで行った国は仕事も含めて三十一カ国。ピースボートの世界一周クルーズに船医として、二〇二三年の八月から十二月まで参加した。千八百人が乗り、半分が七十歳以上。百五日間で延べ千五百人の患者が来て、新型コロナウイルスが百七十人、十七人が途中で帰った。亡くなった方もいた。外国人医師もいて、インドネシア人の看護師と私と彼とで休みなく頑張った。

最後に。「誰もやったことがないようなことがやりたい。人々が無理だ、不可能だと言ったことに対して、いやできると思った者が新しい物を作ってきた。」大谷翔平の言葉でございませう。

私が医学部を受験する時にみんなが反対した。そんなことは無理だ。だが、挑戦しなければできない。挑戦することが大事。県立広島大学は教育者の方の集まりだ。日本人はどうしてもみんなを一緒にする、飛び出る人の頭をたたこうとする。何か変わったことをしようとする。無理だ、やめという方がいい、危ないと止める。それでも大谷みたいな人が出てきたら、みんなそれを伸ばしてあげる。無理だとかできないとか言わずに、やってみよと、伸ばしてあげることがこれからは必要なのだと思います。

文責 東山慧介(県広大13国際)